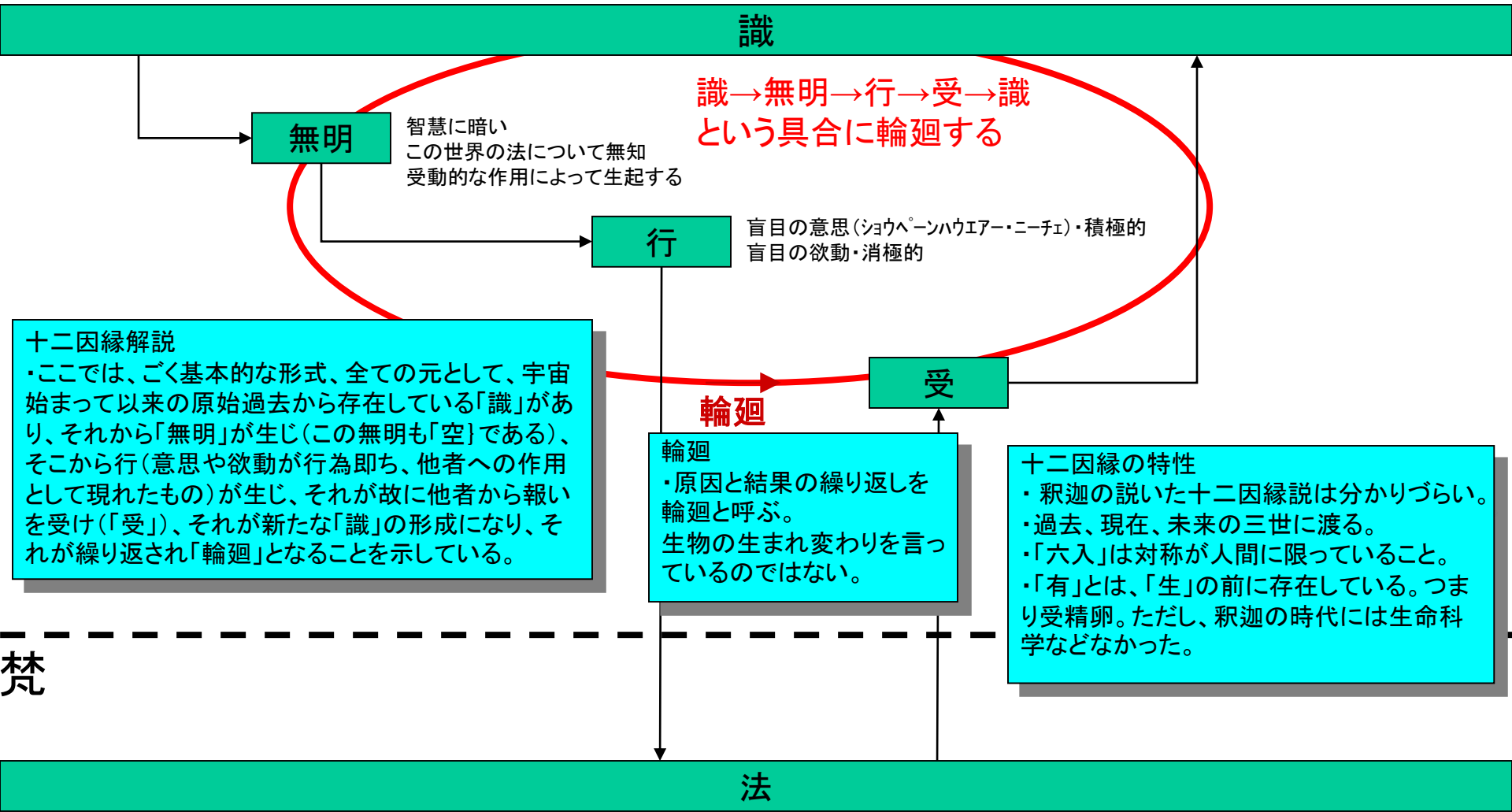


因縁と輪廻(物質などの存在全般)

過去 ← 現在 → 未来

我(五蘊により構成)



梵

因縁と輪廻(人間を含めた生物全般)

過去 ← 現在 → 未来

我

無明

・識を正しく捉えられない無知(無明)から苦が生じる。逆に無明は、識から生じる。

識(阿羅耶識)

無明

名色

物質・生物

生物・人間

六処

眼耳鼻舌身意

意思・欲動

行

無明・意思・愛までは克服できない

中道・八正道

執着(欲望への執着、愛情への執着、恐れへの執着、怒りへの執着、貪りへの執着)を持たないための実践

執着

欲望・渴愛

愛

取得

取

愛と取は執着心を現す
取とは自分の物にしたいという欲求

惑・恐・怒・憎・貪・痴

行

触

六処により
外界と接触

受

外界の刺激を
感受する

受

十二因縁解説
 ・全ては外界のものに執着心を持つことによって、その行為に誤りが生じ、結果として悪い報いを受ける。それが「識」に刻まれ、それを因としてさらに悪い行為を誘発する。それが「輪廻」である。
 ・つまり全ての誤りは執着を持つこと。逆に執着を持たないことが「苦」からの解脱と見えよう。
 ・識、無明、意思、欲望、そして愛までは克服不可能である。ただ一箇所愛から執着に移る際、実践によって克服可能である。

梵

法

苦の発生(人間における因縁の構図)

過去 ← 現在 → 未来

我 親

子

愛(性的欲望)

取(性行為)

生

老

病

死

発生(有)

梵

法

ここで苦の基である「生老病死」の原因は、その者にあるのではなく、強いて言えばその親が原因である。つまりその者は生まれる以前には存在していないのであり、当然その者に苦の要因を求めることはできない。はっきり言えば、「親の煩悩が、子に苦しみをもたらしている」(つまり親がセックスした結果、子供たちが苦しみ(生老病死)を受ける)と言えよう。これはごく科学的な考え方である。その親の煩悩を認めることに不快を感じる連中が、子自身にその苦の要因を求めるが故に、前世や輪廻などを持ちだす。明らかに誤った考え方である。それは仏教でいうところの「不生不滅」を理解していないことにより起こる誤解である。

十二因縁

1. まず識がある。
2. 識だけでは、苦は生じない。苦の根本原因は、智慧に暗いことすなわち無明である。
3. 無明から識に至るまでに行がある。行は無明から起こる盲目の意志であり、その行（行為）が識に刻まれる。
4. 識（無生物）から、名色（生物）が生じる。物質である色が精神作用（名）を伴ったことにより生物になる。
5. 生物の感覚機能として、六処（眼耳鼻舌身意）が生じる。
6. 六処により外部と接触（触）が起こる。
7. 触により外界から作用を受ける。（受）
8. 受から愛着が生じる。（愛）
9. 愛から性行為（取）が為される。
10. 取により発生（有）が成る。
11. そして誕生する。（生）
12. そして老死に至る。